

秋田には漢方薬（生薬）の由緒ある歴史がある。1700年代初頭、秋田藩（現在の秋田県）の藩主であった佐竹家は、龍角散として知られる咳止めの生薬を使い始めた。家伝薬として私的に代々使用されてきたこの薬は、1871年にその製薬方法が買い取られ、龍角散株式会社が創業された。この全国的に有名な会社のど飴やその他の咳止め薬は、現在八峰町が運営する特別な栽培・加工施設で栽培されている伝統的なハーブが原料となっている。

主要なハーブの中に、キキョウの根とカモミールの花の2種類のハーブがある。これらは、生薬の安定した国内供給を目的として八峰町が運営している施設内で栽培されている27種類の植物に含まれている。最近まで、キキョウの根を含む多くの原料はすべて中国から供給されていた。多くの薬に使われているシャクヤクも栽培されているが、収穫できるサイズに達するまでに4年かかるという。

この施設の研究者は、栽植距離、熟成収穫、マルチング技術など、さまざまな栽培技術の実験を行い、最も生産的な方法を探している。また、研究者らは、一つの植物に生える茎の数とその根の枝の数との相関関係を探る。栽培者は収穫時に綿密な計算と測定を行い、翌年の栽培をどのようにして改善するかを決める。

キキョウの根は、施設内で選別、洗浄、乾燥される。厚さ1センチ、長さ10センチ以上の根の部分は薬に使われ、それより小さいもの地元のレストランでパスタ、スープ、鍋料理として消費される。根はまた、焙煎した玄米と組み合わせて、地元産ブレンドのノンカフェインコーヒーが作られている。カモミールと他の数種類の植物は、ハーブティーを作るのに使われている。いくつかの製品は、この地域の道の駅で販売されている。